

当別文芸の会だより NO.39

H25・6/25 発行（連絡先・河地良一 TEL23-2103）

6月の読書会は三好文夫の作品でした

新緑の季節ですが、少し天候が逆戻りして肌寒い日が続いた6月20日(土)、白樺コミセン(13:30～)での読書会には、同人(メンバー)12名が参加されました。今回は三好文夫の作品「重い神々の下僕(しもべ)」の感想交流です。司会進行は大口弘美さんが担当してくれました。

三好文夫は昭和4年(1929)、上川郡山部村(現富良野町)の生まれで、教員を40代で退職して作家活動に入りました。昭和40年(1965)に発表されたこの作品は、直木賞候補にもなっています。

久しぶりに、一気に読ませてくれた作品でしたが、この作品の題名通り、今を生きる私たちにとっても避けて通れない、重い課題を突きつけられたような内容でした。

それは、本州からこの蝦夷地(北海道)に渡って来た人たちが、自然を敬い、自然とともに暮らしていた先住民のアイヌの人たちに対して、その後、どのように接してきたかという問題です。

現代社会でも、民族や宗教、そして差別の問題は、世界各地で様々な紛争を引き起こしています。「多文化共生」「和解」などと言われていますが、解決策はあるのでしょうか。

私たちの身近なところにも、こうした問題が心の奥の深いところに内包されていることを気付かせてくれたのが、今回の読書会でした。

文芸誌「当別文芸」(第3号)の発刊

「当別文芸」(第3号)が間もなく発刊されます。30人(35編)が寄稿。A5版(240ページ)で1冊900円で実費頒布となります。乞う、ご期待。

配本は7月9日(火)13:30～14:30、白樺コミセンで行いますので、同人(メンバー)の皆さん、お集まりください(昨年同様の冊数でお願い)。

7月は登別・白老の「文学散歩」です

7月27日(土)の参加申込みはお早目に。6月の例会に参加出来なかった方には、このたよりと一緒に案内を同封いたしました。参加お待ちしております。

今回は12名が出席、初めに当別観光協会会長の目黒さんから、7月19日に行われる『本庄陸男・石狩川文学碑』の献花式についてご説明がありました。読む会としての参加を呼びかけるものでしたが、当日は堀江さんが『石狩川』の一節を朗読することになりました。

どうぞ、多数ご参加下さいますようご案内申し上げます。

第3回目は第二章の第五節から第十節まで、あらすじは阿賀妻が「石狩税庫」の請負決定の朗報を土産にシッブに戻ってみると、お館では意外にも自裁した高倉利吉の葬儀の最中。こみ上げる思いを抑えきれずに、利吉の妻が主君や阿賀妻を攻め立てる場面でした。

レポーターは一番若手の狩野さんで、その若さを発揮した新鮮な読みを披露していただきました。「とっつき的小屋」「とりあえず松」「鉄槌の女柱」「意気揚々と帰ってきた阿賀妻に空気読めよ…という雰囲気」「安陪誠之助が唐突に出てくる」「高倉利吉の妻の、奥さんとしてはどうなのさ、嘆きぶちまけトーク」「だんなの留守に、女性が集まっておしゃべり、今ならメールを…。とりわけ高倉利吉の妻の訴えについて、皆さんの想いが話されました。「殿様よりも夫が第一…という女性、残念無念！」「阿賀妻は口惜しかったのでは…、女々しい。」「当時の女性はもっと慎み深いのでは…」「更年期とは…」などなど紛々！

まとめとして「史実と創作の葛藤が出てきている。」「阿賀妻の生き方、考え方、やり方に注目して行きたい。」「武士らしい生活態度はいつまで続き、どんな教育がなされたのか。」「石狩川は完成した作品ではないので、『石狩は懐く』など、完成した作品を読まなくては…。」「皆さんのご意見がたくさん出てきて嬉しい！」「文章を一字一句読んでいくと味がある。」等々。

会を重ねるごとに皆さんの読みが具体的に深まってきていることを、お互いに確かめ合うことが出来た、貴重な時間になったと思います。次回は7月22日(月)、同じ会場で、話題提供者は手代木さん、範囲は第三章第一節から第六節までです。 [文責・東前]